

「不戦へつなぐ 戦没学生遺稿展」開催にあたって

『きけ わだつみのこえ』（一九四九年）の刊行以来、「わだつみの悲劇をくりかえすな」を心の中心において活動してきた日本戦没学生記念会（わだつみ会）は、「学徒出陣」から五〇年を期して「記念館」設立を会内外の平和を希求する人々に呼びかけて浄財を集め、二〇〇六年の十二月一日、「わだつみのこえ記念館」を開設するにいたしました。

はるけき戦地から海をわたって届けられた手紙や日誌、いくつかの偶然と心ある人々のリレーによって両親や友人のもとに還ってきたこれらの遺品は、大切に保存されていた遺族や友人の方々の手から、こうして私どもに託されました。

一九三一年の中国侵略からアジア・太平洋に拡大した戦争は、四五年の日本の敗戦により終結しましたが、この間、青年たちは一枚の召集令状で兵士となることを義務づけられ、戦い、命を失いました。日本人、そこには民族を異にしながら大日本帝国軍隊に動員された台湾・朝鮮の青年たちが含まれます。日本が起こした戦争によってアジア・太平洋地域の人々は、日本人をはるかに超える犠牲を強いられました。

今年は一九四三年の「学徒出陣」から七〇年、生還した学徒兵

をはじめ、当時は子どもだった世代も少数者となり、自らの体験を、肉声を通して若い世代へ伝える機会が過ぎ去ろうとしています。戦没学生の遺念を、戦争体験世代の平和への意志を、若い世代につないでゆきたい、若い世代に受け継いでほしいという願いをこめて、このたびの遺稿展を企画いたしました。

戦没学生たちが書き残した文に直接触れ、その沈黙の声と対話し、そこから想像をひろげて、近隣諸国の戦争犠牲者にも思いを寄せてほしい、そしていまなお世界で絶えない紛争や戦争、日本国内で平和を脅かす動きに目をこらし、不戦の意志を新たにしようという私たちの決意と活動に加わってほしいと切に願います。さらに、常設展、企画展、フォーラムなど、学びの場と平和を願う人々の交流の場にもなっている「わだつみのこえ記念館」にも足を運んでいただきたいと願っています。

二〇一三年八月十二日

わだつみのこえ記念館

（認定NPO法人わだつみ記念館基金）

日本戦没学生記念会（わだつみ会）

目 次

「不戦へつなく 戦没学生遺稿展」開催にあたって	1
戦没学生の遺稿	
1 日中戦争期	3
渡辺直己 篠崎二郎 田村正 戸谷敏之 松永茂雄 田辺利宏 松永龍樹 横山末繁	
2 太平洋戦争期	8
永田和生 木下浩 浅見有一 長門良知 小倉正久 岩田讓 柳田陽一 井上淳 林憲正 宇田川達 奥村克郎 上村元太 北川智 石岡俊蔵 宅嶋徳光 中村勇 大塚章	
3 学徒出陣期	18
久保恵男 海上春雄 吉村友男 大塚晟夫 原亮 林尹夫 長谷川信 佐々木八郎 池田浩平 上原良司 山隅観 鷺尾克巳 岩ヶ谷治祿 松岡欣平 板尾興市 金綱克巳 山根明	
4 戦 後	28
木村久夫 関口清 白井成徳 稲垣光夫 上藤憲三	
戦没朝鮮人学生関連資料	31
卓庚鉉 韓聖洙 廬龍愚 趙文相	
年表「中国侵略からアジア・太平洋戦争へ」	33
戦時学徒必携「大東亜」地図	34
わだつみのこえ記念館所蔵・戦没学生関係主要資料リスト	35
「戦後」の真の到来のために 細見和之	37

戦没学生の遺稿

1 日中戦争期

日本の中国への侵略は、一九三一年の柳条湖事件による満州占領から新局面に入り（満州事変）、三七年に盧溝橋における衝突から日中全面戦争となった。緒戦で軍事上優位に立った日本軍だが、確保できたのは点と線（都市と鉄道）だけで、広い地域の住民を支配することはできなかつた。しかも戦時国際法を無視して略奪・暴行・虐殺行為を繰り返す日本軍に中国民衆の反感は増大する一方だった。

わたなべ なおき
渡辺 直己

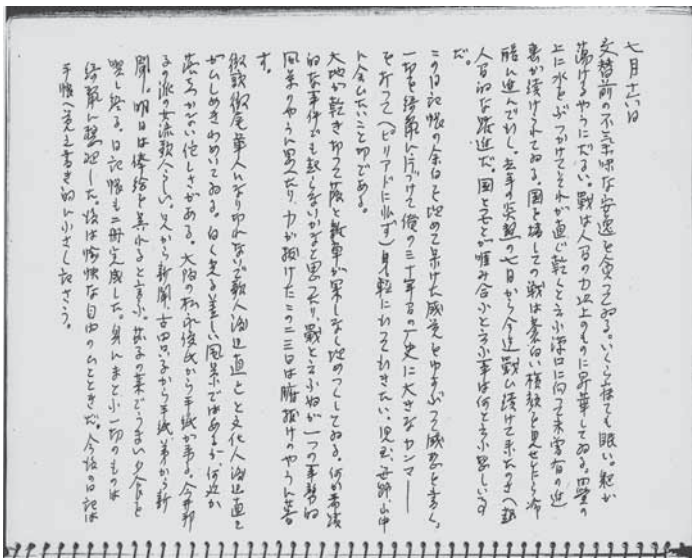
一九〇八年（明治41）6月4日生。
 広島県出身。
 26年（大正15）4月、広島高等師範学校文科第一部国漢学科入学。
 31年2月、幹部候補生として広島歩兵第11連隊に入営。11月除隊。
 31年12月、呉市立高等女学校教諭になる。
 37年7月、充員召集により、広島歩兵第11連隊補充隊に入営。
 39年8月21日、官舎の浸水による石灰爆破により死亡。戦死扱いとなる。
 享年31歳。

渡辺直己『陣中日記』第三冊

戦は人間の力以上のものに昇華してゐる。豊の上に水をぶっかけてそれが直ぐ乾くと云ふ漢口（中国国民政府の首都）に向つて未曾有の進撃が続けられてゐる。国を賭しての戦は蒼白い横顔を見せ乍ら冷酷に進んで行く。去

年の炎熱の七月から今迄戦ひ続けて来たのさへ超人間的な躍進だ。国と国とが唾み合ふと云ふ事は何と云ふ悲しい事だ。……徹頭徹尾軍人になり切れないで歌人渡辺直己と文化人渡辺直己がひしめきわめてゐる。

（一九三八年七月一日）



篠崎 二郎

しのざき

じろう

一九一〇年（明治43）3月2日生。
奈良県出身。

同志社大学予科を経て、31年（昭和6）、同文学部英文学科進学。

35年卒業。新聞記者記者を希望するが果たせず、大阪市立東商業学校の英語科の教員になる。

37年2月、結婚。

37年4月、通信講習所に勤める。

38年4月、補充兵として応召、奈良の歩兵第38連隊に入営。

38年8月、南京の中支派遣軍岩松部隊司令部付で新聞班に所属。

40年5月、召集解除。

41年8月、再度応召。

41年9月、平壤の尼崎隊に所属。後、南海派遣軍に属し、東部ニューギニアに転戦。

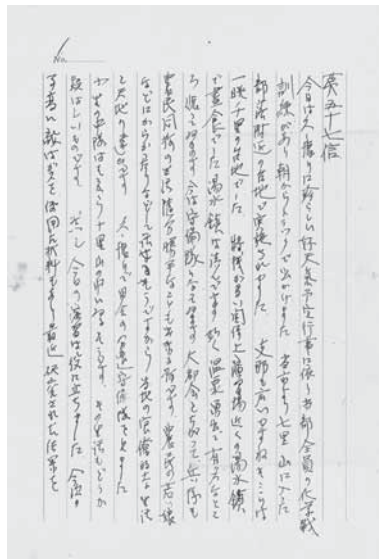
44年1月18日、東部ニューギニアにて戦死。享年33歳。

「篠崎二郎書簡」（篠崎寿子宛第五七信）

今日は久し振りに珍らしい好天気予定行事に依り、当部全員の化学戦訓練があり、朝からトラックで出かけました。当市より七里山に入った部落附近の台地で実施されました。……今は守備隊になつてゐます。大都会とち

がつて兵隊も農民同様の生活、随分勝手なこととも出来る様です。農民の若い娘などにかつたりなどして活「暮」せるそうですから、当地の官僚的な生活と天地の違いです。久し振りで田舎の分遣守備隊を見ました。小生の中隊はそこから十里山の中にあるそうです。その生活もどうか疑はしいものです。

（一九三九年二月一七日）



田村 正

たむら

まさし

一九一〇年（明治43年）12月5日生。

栃木県出身。

浦和高等学校を経て、35年（昭和10）、東京帝国大学医学部卒業。養育院に医師として勤務。

38年10月15日、高橋嘉代子と結婚。

41年8月3日、召集により陸軍東部第36部隊入

営。

41年9月13日、宇都宮陸軍病院に転属、軍医。

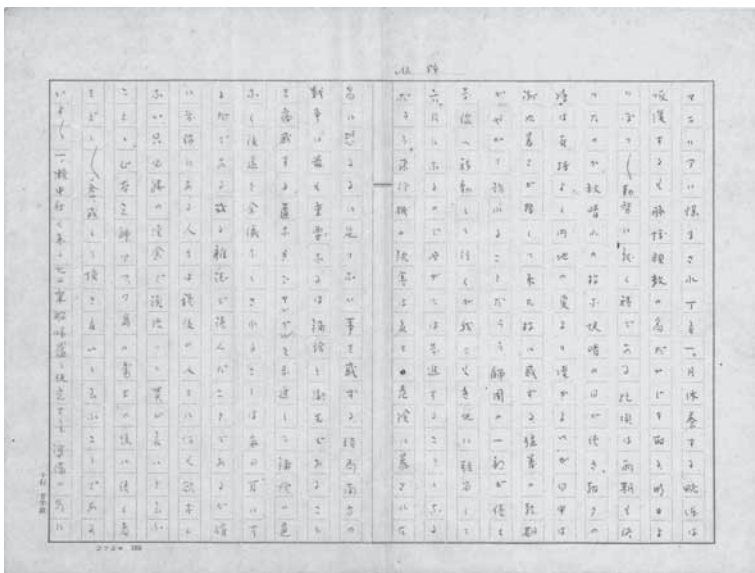
43年2月22日、ニューギニアのウエワークに上陸。

44年12月12日、ウエワークにて戦病死。

享年35歳。

田村正『ニューギニア日記』

結局南方の戦争に最も重要なるは補給と衛生



であることを痛感する。道なきジャングルを前進して補給の道なく後退を余儀なくされることは毎日耳にする所である。或る雑誌で読んだことであるが、確に前線にある人々は銃後の人々に何も欲求しない。只必勝の信念で頑張つて貰ひ度いと云ふこと、山本元帥、アツツ島の勇士の後に続く者をどん／＼養成して頂き度いと云ふことである。

(一九四三年八月三日)

戸谷 敏之

一九二二(明治45) 7月27日生。

長野県出身。

39年(昭和14)、法政大学経済学部卒業。

41年7月入営、同9月除隊。

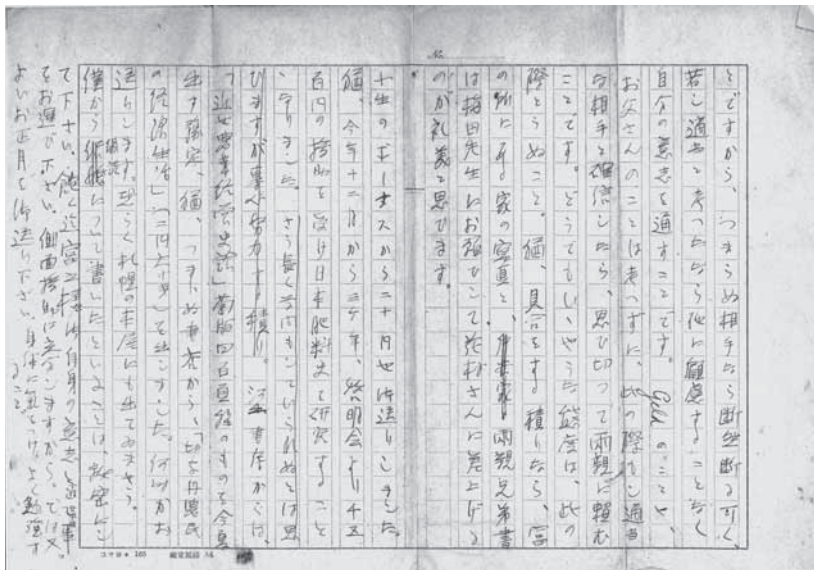
44年3月再召集、東京の東部第6部隊に入営。

45年9月、フィリピンのカガヤン・アパリ山岳地帯で戦死。

享年33歳。

「戸谷敏之書簡」(戸谷富之宛)

小生のポーナスから二十円也御送りしました。猶、今年十二月から三ヶ年、啓明会より千五百円の援助を受け日本肥料史を研究すること、なりました。さう長く学問もしてられ



ぬとは思いますが専心努力する積り。河出書房からは「近世農業経営史論」菊判四百頁程のものを今夏出す予定。猶、つまらぬ書店から、「切支丹農民の経済生活」(二円六十銭)を出しました。何時かお送りします。恐らく札幌の本屋にも出てゐませう。

僕から縁談について書いたといふことは、秘密にして下さい。飽く迄富之様御自身の意志として事をお運び下さい。側面援助は充分し

松永 茂雄

一九一三年(大正2) 4月30日生。

東京府出身。

31年(昭和6) 4月、第一高等学校入学。

32年、第一高等学校中退。

34年1月、現役兵として陸軍歩兵第一連隊に入営。

35年、除隊。私立花園学園小学部に勤務し児童教育にあたる。並行して文芸同人誌『ゆめみこ』

を36年4月までに8冊刊行、劇作・詩・エッセイ・歌論を執筆。

36年4月、国学院大学予科に入学。

37年10月、応召。11月上海派遣軍飯塚部隊高見

部隊上野隊に配属。

38年11月28日、上海の呉淞陸軍病院にて戦病死。享年25歳。

松永茂雄「収録作品批評」の中の「観賞雑題」への批評

こゝで枝葉の問題ではあるが「制服の処女」に就いて一寸云はせて頂きます。君はあれの優れた点は文学的内容に在つて表現方法には

ますから。では又。よいお正月を御送り下さい。身体に気をつけ、よく勉強すること。

(一九四三年二月九日)

なかつたと云はれます。無論あれの文学的内容が優れて居たことは事実です。併しあれ位のものには活字に組まれた小説や脚本にはいくらかあります。あの映画のよさは適切なその表現にあつたのではないでせうか。(表現が其の方法に於て独立して優秀だとは云ひませんが)

(一九三三年四月一七日、『ラウテ』第一号付録所収)



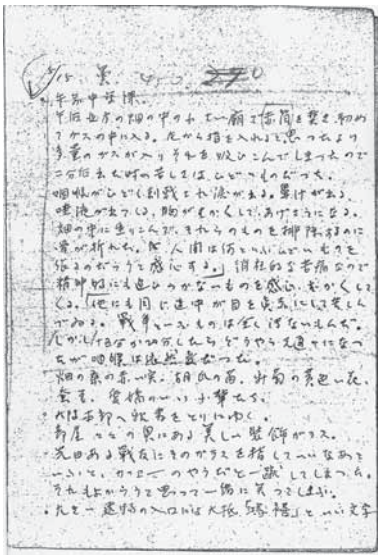
たなべ
田辺 利宏
としひろ

一九一五年(大正4) 5月19日生。
岡山県出身。
30年(昭和5) 4月、上京して神田の帝国書院に勤めながら、法政大学商業学校に通う。
34年4月、商業学校を卒業し、日本大学予科文科に入學。

36年3月、同大学法文学部文学科英文科進學、
39年3月卒業。
39年9月、広島県福山市の増川高等女学校に勤め、英語と国語を教える。
39年12月、松江に入營。後中国各地を転戦。
41年8月24日、中国江蘇省北部にて戦死。
享年26歳。

『田辺利宏日記』

午后北方の畑の中の小さい廟で赤筒を焚き、初めてガスの中に入る。左から指を入れると思つたより多量のガスが入りそれを吸ひこんでしまつたので二分后出た時の苦しさはひどいものだつた。咽喉がひどく刺激され涙が出る。鼻汁が出る。唾液が出てくる。胸がむかしくして、あげそうになる。畑の中に座りこんで、それらのものを排除するのに骨が折れた。人間はなんといふひどいものを作るのだらうと感心する。消極的な苦痛なので精神的



にも追いつかないものを感じ、むかしくしてくる。他にも同じ連中が目を真赤にして苦しんでゐる。戦争といふものは全く汚いものだ。
(一九四〇年五月一五日)

まつなが
松永 龍樹
たつき

一九一六年(大正5) 8月22日生。
東京府出身。
38年(昭和13) 4月、国学院大学文学部国文学科入學、41年4月卒業。
42年2月応召、陸軍に入營。
44年5月28日、中国河南省魯山付近の戦闘で戦死。
享年27歳。

